

# 初現期の青銅彝器

難波純子

【要約】二里頭期・二里崗期の青銅彝器の精緻な編年案を組み立て、その作業を通じて初現期の青銅彝器の発達の様相をさぐるこ  
とが本稿の目的である。まず同一器種内に存在する器形や裝飾構成の異なる複数の系統を分類したうえで、各々について、紋様の  
種類や表現の変化のほか、柱帽の形態変化や紋様帯の増加、饗首の出現など、区別しやすい要素に注目して型式分類を行い、変遷  
を考察した。そして、特徴の共有関係によって青銅器相互の併行関係を検討した結果、二里頭期は二期、二里崗期は四期に細分し  
えた。これは、土器による分期ともほぼ対応すると考えられ、墓の出土資料の共存関係によっても、その併行関係は裏付けられる。  
最後に、各器種の鑄造を先の編年案に照らしあわせて検討したところ、鑄型の構造が徐々に複雑になる過程が看取できた。土  
器を模倣して作り始められた青銅彝器は、鑄造技術の進歩にとまなない、あるいは加熱機能から裝飾へと青銅の性質の利用の重点が  
転じたことによって、器種が増加し多様な器形・裝飾が生み出されていったのであろう。

史林 七二巻三号 一九八九年三月

## 一 はじめに

二里頭期・二里崗期は、殷代以降の文化の諸要素が萌芽し、発展した時代である。主に祖先の祭りに用いられていたと  
される青銅容器類(彝器)もまた、二里頭期に出現したことが明らかになっている。殷代の諸器物の中でも、とりわけ青銅  
彝器を研究することは、様々な意義があろう。例えばその組合せや出土状況の検討によって、祭りにおける彝器の用いら  
れ方などの復原が可能になるであろうし、彝器の分布地域の変遷を検討することによって、共通の祭りを行ったり、政治

上のまとまりを持つ地域がどのように広がっていったかも推定できるであろう。技術史的、あるいは文化的な様々な視点から研究を進めることも可能である。しかし、このような問題を解決していくうえで、精緻な編年は、その基盤として最も重要である。本稿では、初現・成立期にあたる二里頭期・二里崗期の青銅彝器をとりあげ、型式学的な検討を通して編年を試みる。そして、その作業を通じて、青銅彝器は発生期からどのように分化し、発達していったかを明らかにしたい。まず、これまでに行われてきた型式学的研究について、概観してみよう。

二里頭期の青銅彝器<sup>①</sup>は、一九七二年、二里頭期に遡る青銅製爵が発見されたことによって、その存在が確認された<sup>②</sup>。以来、河南省偃師県二里頭遺跡<sup>③</sup>では銅爵約十点と銅罍一点が出土している。飯島武次は、この時期の爵についての論考を発表している<sup>④</sup>。

一方、二里崗期の青銅器は、解放以前にも出土していたが、殷墟期青銅器への発展段階としての重要性が認められるようになったのは、一九五〇年代に河南省輝県琉璃閣の殷代墓群や、二里崗をはじめとする河南省鄭州市内各地の遺跡の発見によって、二里崗期が設定されてからのことである<sup>⑤⑥⑦</sup>。

二里崗期の青銅器の型式学的研究は、これまで紋様と器形の両面からのアプローチが行われてきた。

器形の研究では、湖北省黃陂県盤龍城遺跡の二里崗期併行の墓葬出土例を、墓葬の切り合い関係と、各墓に副葬された青銅器の型式差に基づき、各器種の変遷を考察したものが最初である<sup>⑧</sup>。現在の知見では、盤龍城のこれらの墓葬はほとんどが二里崗上層期に属するので、この編年を二里崗期全期の青銅器の編年とすることはできない。また、この地の青銅器は地方的要素を持っている可能性があるもので、それを考慮する必要がある。

鄒衡は、二里崗期から殷墟期までの分期案を示した<sup>⑨</sup>。二里崗期の青銅彝器については爵と觚の型式分類を試み、各々の型式を、氏の土器編年による四分期の、各期に配している。しかし、その併行関係の根拠は不明である。また、飯島武次の爵についての研究<sup>⑩</sup>では、柱や器の形態によって分けたグループ毎の変遷を考察している点は評価できるが、各グループ

がすべて当初より併存したという前提についてはその根拠が示されておらず、問題がある。

紋様を中心とした研究には、マックス・レールや楊育彬のものがある。レールは、殷周青銅器全般を紋様の上から五段階に分けた。<sup>⑪</sup>二里崗期の青銅器は、その第Ⅰ～Ⅱ様式に含まれる。楊育彬は二里崗下層期に属する鄭州市東里路遺跡の資料と、それまでに発見されていた上層期の墓の副葬青銅器とを比較して、下層期から上層期への紋様の変化を考察している。<sup>⑫</sup>

こうした中で裴明相は、鼎・鬲・尊・罍・盃・觚・爵を二～五型式に分類し、二里崗下層期から上層期への青銅器の変化について、器形の変化・紋様帯の増加・器壁の厚化などを総合的に加味して論じた。<sup>⑬</sup>

青銅器の各器種には、器形の異なる複数の「小形式」が存在することが多い。また、いくつかの器種では、小形式の中にさらに紋様帯の構成や用いる単位紋様の組合せなどを異にする複数の系統が併存することもある。各小形式・各系統は、さらに器形や紋様表現の変化などに基づいて、新旧の差異を示す「型式」に細分しうる。<sup>⑭</sup>従来の研究の最大の問題点は紋様帯構成や器形の検討が徹底していなかったため、同一器種内に併存する複数の小形式や系統の分離が不明瞭であり、複数小形式・系統に属する型式を一系列的に編年することが多かったことである。また、各器種各型式の併行関係の把握が十分に行われておらず、墓葬の一括出土品を同時期と仮定して分類を行っていることもあって、分期は、土器編年上の大まかな時期区分に対応させるにとどまっている。

そこで私は、小形式、裝飾構成による系統、型式を分類したのち、青銅器相互、或は土器編年との併行関係を検討し、これを共伴関係によって再度検討するという方法をとる。

一方、殷代の青銅器は、鑄造技術についても、特に殷墟期のものに関して、研究が進みつつある。青銅器は、鑄型構造に規制されて器形が変化することがあり、あるいは、器形を変化させるために鑄型の構造を変化させることがある。したがって、鑄型構造の変化は、重要な型式設定の要素となる。ノエル・バーナードは、二里頭期・二里崗期の青銅器も含め

て鑄造技術について考察を行っており、中でも爵について鑄型構造の変化を体系的に捉えようとした研究は、新たな視点を呈示している<sup>⑦</sup>。日本で実見できる資料はごく少ないが、こうした観点からも検討を加え、紋様と器形・鑄造技術の各要素を総合的に考慮して青銅器の変遷について考えてみたい。

ところで、二里崗期の青銅器は、陝西省や湖北省など、当時の中心地・鄭州から離れた地方で発見されることもあるが、まず、中心地で作られたと考えられる青銅器を対象をしばって編年を行い、その後、地方出土の青銅器を検討する必要があると私は考える。しかし、多種にわたる器種・型式をカバーするには、鄭州市内出土の資料数はやや不十分である。該期の青銅器には、鄭州市を中心に半径八十kmの範囲に集中して出土する一群があるので、これらを中心地・鄭州で作られたもの、あるいは、鄭州での型式とさほど隔たりがないものと考え、ここでは、この範囲より出土した青銅器を含めて検討した。

なお、二里頭期と二里崗期、二里崗期と殷墟期をどのように区分するかは、非常に重要な問題である。この三つの時期は、これまで別々に研究が行われることが多く、特に青銅器は型式の連続性についても時期区分についても、あまり論じられてこなかった。二里頭期と二里崗期は、土器編年という二里頭四期と二里崗下層期の一部が併行するという説がある。しかし、この二つの時期では、多くの研究者が指摘するように土器の器種構成に差異が認められるのみならず、以下に述べるように青銅器の器形や鑄造技法にも若干のヒアタスが存在するので、ここでは二里頭四期は、二里崗下層期の古段階に先行するという通説にしたがう。そして、青銅器の変遷を考察するうえで両者を区別して説明するのが妥当であると考えるので、別章に分けて論じることにした。また、二里崗期から殷墟初期にかけての青銅器にも紋様・鑄造技法のうえで画期が認められるようであるが、それらの画期は、「遷都」の時期とはややずれがあると思われる。しかし、本稿では従来の時期区分に従い、鄭州市内で発見される資料を、「二里崗期」に含めて考察する。時期区分については、機会を改めて詳しく論じることとしたい。

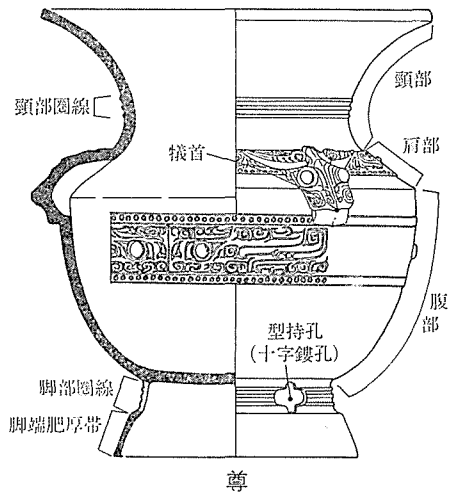
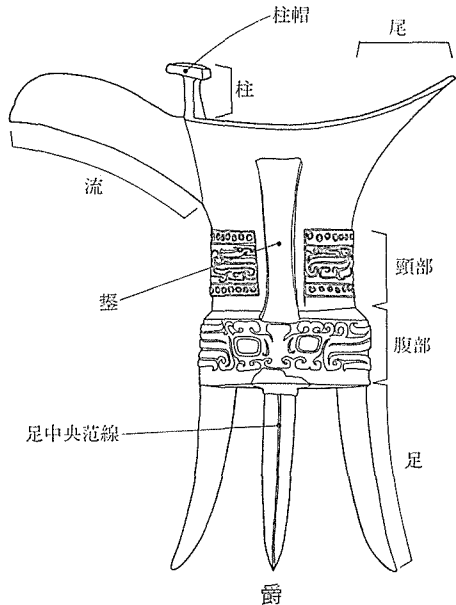


図1 器の部分名称

図1に、爵と尊の部分名称を示した。原則として、三足器は爵と、圈脚器は尊と同様の部分名称を用いる。

- ① 以下、例えば、青銅製爵を銅爵と略記する。また、青銅彝器は青銅器と略記する。
- ② 中国科学院考古研究所二里头工作队「河南偃师二里头遗址三・八区発掘簡報」(『考古』一九七五年第五期)。
- ③ 河南省偃师二里头遗址や鄧州市が、史実上のいずれの「都」にあたるかは別として、大規模な建築遺構(宮殿址)や城壁、土器や骨器や青銅器の工房などがみつかった二里头遗址や鄧州市が、文化の中心地であったことは定説化している。
- ④ 飯島武次「殷前期の提言(8)」—青銅器(1)—『古代文化』第三一

- 卷第四号、一九七九年)一—五頁(『夏殷文化の考古学研究』、山川出版社、東京、一九八五年所収)。
- ⑤ 中国科学院考古研究所編著『輝県発掘報告』中国田野考古報告集第一号、科学出版社、北京、一九五六年。
- ⑥ 鄧州市文物工作組「鄧州市殷商遗址地层關係介紹」(『文物參考資料』一九五四年第一二期)。
- ⑦ 梅原未治は、『古銅器形態の考古学研究』(『東方文化研究所研究報告』第十五冊、京都、一九四〇年)三三頁で、該期の銅盃について、龍山期の土器の形態をうけつぐ最古の銅器の一つとしてあつており、

考察過程に問題はあがるが、当時としては卓見であった。しかし残念なことに、その他の器種についてはこの蓋と同時期であると認識せず、北方の地方様式であると誤解し、その後も考えを改めないままに終わっている（梅原末治「殷中期とされている鄭州出土青銅器の性質」『史学』第三十三卷第二号、一九六一年）。

⑨ 湖北省博物館「盤龍城商代二里崗期的青銅器」『文物』一九七六年第二期。林巳奈夫もまた、この説に依拠して、該期の青銅器を、「殷中期Ⅰ」「殷中期Ⅱ」に分期している。

⑩ 鄒衡「試論夏文化」『夏商周考古學論文集』、文物出版社、北京、一九八〇年。

⑪ 注④前掲文献、六一—三頁。

⑫ M. Loehr, *The Bronze Styles of the Anyang Period*, *Archives of the Chinese Art Society of America*, vol. VII, 1953.

## 二 紋様の検討

二里頭期・二里崗期青銅器の紋様の種類や表現は各器種とも同様に変化していったと仮定して、器形について検討する前に紋様の变化について整理してみよう。

二里頭期の青銅器には、当初、紋様はなかったが、圈線で区切られた区画の中に、列点を飾る乳釘紋が出現する。

二里崗期には、弦紋・連珠紋・X字紋・斜格子紋などの幾何学的な紋様が出現する。これらは突線で表されているから、鑄型に直接彫り込んだものと思われる。二里崗期にはさらに、饕餮紋を代表とする獸紋が出現する。林巳奈夫によれば、この期の「饕餮紋」と総称される獸面紋は、角によって無角・T字型羊角・牛角などの各種に分けることができ、また、

主要な獸紋には他に、夔紋・凹字形龍・無目獸面紋（飛紋）などがあるという。種類の区別は、後の時代まで厳格に行われ

⑬ 楊育彬・趙靈芝・孫建國・郭培青「近幾年來在鄭州新發現的商代青銅器」『中原文物』一九八一年第二期。

⑭ 楊育彬「鄭州二里崗期的商代青銅容器的分期和鑄造」『中原文物』一九八一年特刊。

⑮ 裴明相「鄭州商代二里崗期的青銅容器概述」『中國考古學會第四次年會論文集』一九八三年、文物出版社、北京、一九八五年。

⑯ 林巳奈夫や鄒衡のいう「型」に相当する（林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覽一、吉川弘文館、東京、一九八四年）。

⑰ 小形式を「○○型」、裝飾構成による分類を「○○類」、時間的な変化を示す型式を「○○式」と表すこととする。

⑱ N. Barnard & Cheung Kwong-Yue, *Studies in Chinese Archaeology, 1980-1982*, Hong Kong, 1983, pp. 355-367.

るようであるが、紋様表現自体は歩調を合せて変化しようなので、表現の時間的な変遷について若干考察してみよう。

レールの呈示した説によれば、<sup>⑤</sup>

第Ⅰ様式 無紋の表面に細い突線で紋様が表現されたもの。

第Ⅱ様式 突線に代って窪んだ線で紋様の輪郭が表現されたもの。

の順に変化するという。

楊育彬<sup>④</sup>や裴明相<sup>⑤</sup>も、恐らくレールの論をふまえて無紋・弦紋・単線鑿齒紋・目申紋を施すものから、複雑な鑿齒紋を施すものへと変遷するとして、それがほぼ、二里崗下層期から、上層期への変化と対応するであろうと考えている。

まず、諸氏の意見にしたがい、a類すなわち紋様が突線で表されるものと、b類すなわち紋様の陽出部が広いものとに分類しよう。鑿齒紋の表現を、

a 1類 角や眼睛を持たなかったり胴部が短いなど、表現が一定せず彫りの浅いもの。

a 2類 角や、上下に折り返す胴部・手・足を備え、定形化した最も単純なもの。

a 3類 羽状表現や、上下の胴部の間に裝飾的な渦などの表現を加えることによって、複雑な形状をとるもの。

b 1類 角や、上下に折れる胴部・手・足などを備えるが、最も単純な形をとるもの。

b 2類 紋様は同幅の陽出部によって表されるが、裝飾的な表現を加え、複雑な形状をとるもの。

b 3類 鑿齒の胴部などに、細かい凹線による渦紋を充填することによって、より複雑な表現を行うもの。  
に分ける(図2)<sup>⑥</sup>。また、他の獸紋も、同様に分類できる。

バーナードは、b類の表現様式の獸紋の陽出部の幅が凹部の幅よりも広いことから、原型に彫り込んだ紋様を鑄型に押捺したと考えている。<sup>⑦</sup>さらに、このような獸紋は紋様帯全体が器表より突出しているので、私は、粘土帯をはりつけ、これに紋様を彫り込んだ原型を鑄型に押捺することによって、鑄型の紋様帯の部分全体が窪んだと考える。<sup>⑧</sup>

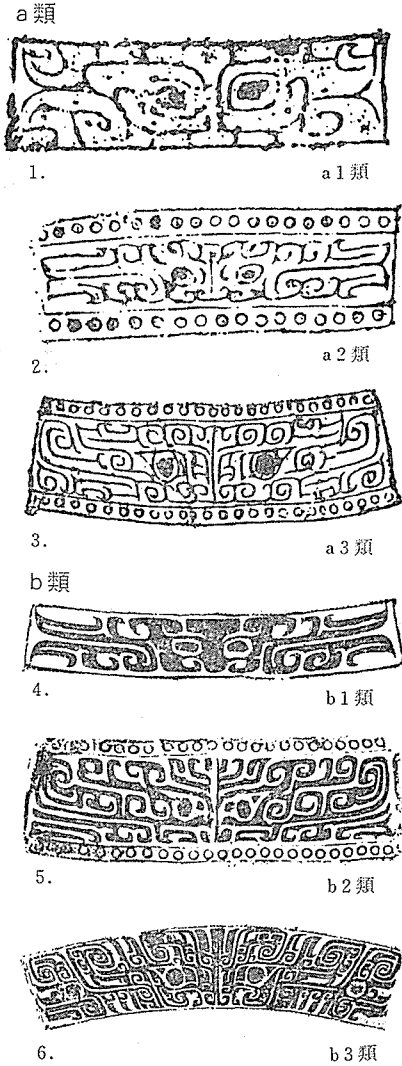


図2 饕餮紋の表現（縮尺不同）

（1：鄭州東関爵，2：鄭州二里崗罍，3：鄭州白家庄M7罍，4：鄭州銘功路M2鼎，5：鄭州烟廠罍，6：鄭州白家庄M3尊）

一方、a2類とb1類、a3類とb2類は、饕餮紋の形状自体は同じであり、a類は原型を用いずに鑄型に直接彫り込んだにすぎない。林巳奈夫は、同一器に二つの表現が併用されている例もあることから、a類がいずれもb1類より古い段階のものであるとは限らないと述べており、この意見に賛成したい。従って、a1↓a2・b1↓a3・b2↓b3の順に出現したと仮定できよう。また、幾何学紋とa1類饕餮紋は、一つの爵の表裏に飾られた例があるので、両者は併存していたと考えられよう。

以上の紋様表現の出現期についてまとめると、

第一段階 無紋

第二段階 乳釘紋

第三段階 幾何学紋・a1類表現の饕餮紋を代表とする獸紋



第四段階 a 2類・b 1類饕餮紋(獸紋)

第五段階 a 3類・b 2類饕餮紋(獸紋)

第六段階 b 3類饕餮紋(獸紋)

の諸段階があると仮定できる。大まかには、この方向に紋様は変化したと考えられる。しかし、器種や小形式によって、紋様帯の幅と長さはかなりばらつきがあり、与えられた紋様帯を埋めるのに、選択される紋様の種類が規制されてしまうこともあるようである。例えば、鼎A型の饕餮紋帯は幅が狭いので、b 3類の様に面積をとる表現の出現は遅れるようである。ここでは、あくまで、出現の順序を示すにとどまる。

① 林巳奈夫『殷周時代青銅器紋様の研究』殷周青銅器綜覽二、吉川弘文館、東京、一九八六年、七八―九〇頁。

② 林巳奈夫「殷中期に由来する鬼神」『東方学報』京都、第四十一冊、一九七〇年。

③ 第一章注⑩前掲文献、四五―四六頁。

④ 第一章注⑪前掲文献、五一―六頁。

⑤ 第一章注⑫前掲文献、三七―三八頁。

⑥ 饕餮に「羽根」が加えられ複雑化する様子については、林巳奈夫が大まかに論じている。注⑫前掲文献、四六頁・五三―五五頁。注⑬前掲文献、五三―五四頁。b 2類からb 3類へは、漸移的に変化すると考えられるが、その区別として、私は次のように考えている。すなわち、b 3類では凹部が、陽出部で表される主紋に対する装飾として後

から付け加えられるので、相互に分断されているのに対し、b 2類では、陽出部・凹部ともに、ほぼ分断されない。

⑦ N. Barnard, *The Origins of Bronze Casting in Ancient China*, N. Barnard & Sato Tanotcu, *Metallurgical Remains of Ancient China*, 日庇社、東京、一九七五年、p. 3.

⑧ こうした饕餮紋を彫り込んだ板状の製陶用の原型が鄭州市銘功路遺跡(二里崗上層期)において出土しているの、私は当初、このような原型を用いたと考えたが、林巳奈夫氏より、板状のものでは、丸みを帯びた外型に押捺すると歪みが生じるという指摘をうけた。殷墟期のものについては、器の原型に紋様を彫りこんでいたと考えられているので、二里崗期も同様であったと考えられる。

⑨ 注⑬前掲文献、七八頁。

### 三 器形の変遷——二里頭期——

(1) 爵(図3-1-1~3)

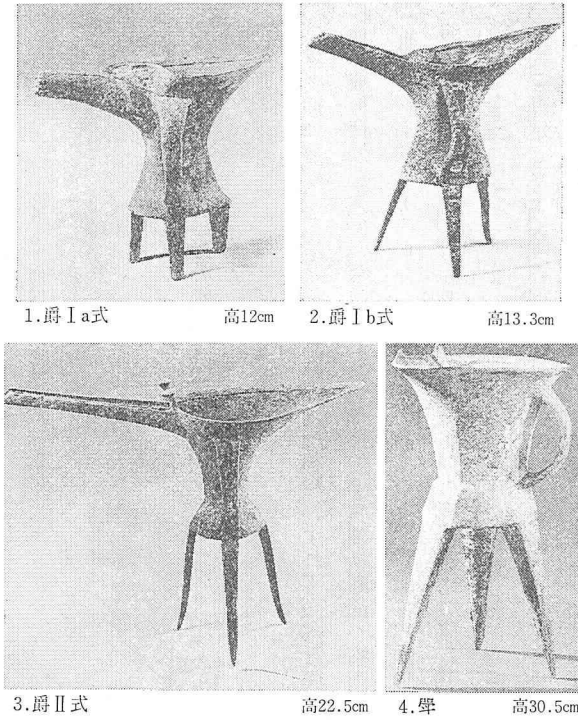


図3 二里頭期の爵と斝

(1：二里頭Ⅶ T 22②, 2：75 Y L V K 3, 3：二里頭墓, 4：Ⅳ M 9)

二里頭期の爵は、中国では、釘頭状の柱帽を持つ柱を有し、流と尾が長く伸びた型式が新しいと考えられている。<sup>①</sup>飯島武次は、腹部の発達や型持孔の出現・足の形態にも注意することによって各器の組列を呈示しているが、型式分類は保留している。<sup>②</sup>私は概ね氏の意見にしたがい、頸部と腹部の分化を基準に型式分類を行う。

I 式 頸部と腹部の境の屈曲点が明確でない型式。柱がないか、あるいは微かな突出がみられるのみで、器身は無紋である。蓋に型持孔のない I a 式と、型持孔のある I b 式に分ける。I a 式の足は先細りであるが、短く、先端が尖らない。

I b 式の足は先端が尖る。

II 式 頸部と腹部の境に明瞭な屈曲がある型式。1cm 強の高さの柱がつき、釘頭状の柱帽がみられる。蓋には型持孔を持ち、蓋の反対面に乳釘紋が施される例もある。流尾が、非常に長くのびたものがある。

II' 式 腹部に型持孔を持ち、この部分が圈足状になっている型式が存在する。II 式から発達した型式と考えられるが、後代に系譜がたどれないので、II' 式とした。

(2) 斝(図3-1-4)

一九八四年に二里頭遺跡で発見された一例のみが知られている。<sup>③</sup>上方にひらいた頸部と腹部は、明確な段差によって区別され、足は

断面が半円形に近い三角形で空足である。

① 賈彥・楊育彬「河南出土商代青銅器概述」(《河南出土商周青銅器》  
編輯組編『河南出土商周青銅器』(1)、文物出版社、北京、一九八一年)  
二頁。

② 第一章注④前掲文獻、一一五頁。  
③ 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊「一九八四年秋河南偃師二  
里頭遺址發見的幾座墓葬」(《考古》一九八六年第四期)。

#### 四 器形の変遷——二里崗期——

(1) 爵(図5)

二里崗期の爵は、二里頭期Ⅱ式をうけつぎ、いずれも頸部と腹部が明確に分かれている。しかし、二里頭期Ⅱ式ほど流  
の長い資料は知られていない。これまでに、①腹部横断面が楕円形を呈するものが古く、円形に近いものが新しい①。柱  
が低く柱帽が無いものから、柱が徐々に高くなり、柱帽は円錐形、截頭円錐形へと変化する。③二里崗下層期の爵は器壁  
が薄く長流であるのに対して、二里崗上層期の爵は器壁の厚みが増し、底がやや丸みを帯びる。⑤などの指摘がある。私は、  
これらの見解はいずれも正しいと考えるが、①や③は連続的な変化であり、分類基準としては適さないので、次のような  
小形式を設定した上で、腹部・柱・紋様帯の発達に基づいて各小形式を型式分類したい。

A型 腹部が丸く張り出したもののうち、器身に対して腹部の占める比率が低いもの。頸部にのみ紋様帯を持つ。

B型 腹部が丸く張り出すが、器身に対して腹部の占める比率の高いもの④。頸部と腹部に紋様帯を持つ。

C型 頸部と腹部がわずかな段差によって表され、腹部壁が直線的であるもの。頸部にのみ紋様帯を持つ。

の三種類がある。盤龍城遺跡の報告ではA・B型とC型の差を時期差と考えているが、後二者は殷墟出土の器にそれぞれ  
系譜が迎れることから、併存した小形式と考える。

二里頭期に爵や甗に出現した柱には、当初、釘頭状の柱帽がついていたが、徐々に円錐形の柱帽に発達し、頂部に凹紋⑥

が飾られるようになる。さらに、円錐台形の柱帽も出現する。まず、柱の型式について整理してみよう(図4)。  
 双柱 垂直な柱が流の左右に二本あり、柱帽も二つ持つもの。

i 類 上面が平らな三日月形の柱帽を持つ。

ii 類 厚みが増した三日月形の柱帽を持つ。

iii 類 無紋の円錐形柱帽を持つ。

单柱 柱脚がY字状を呈し、柱帽を一つのみ持つもの。

i 類 無紋の円錐形柱帽を持つ。

ii 類 凹紋を飾る円錐形柱帽を持つ。

iii 類 截頭円錐形柱帽を持つ。

次に、右記の柱の型式を考慮に入れて、型式を分類する。

A 型 I 式 鑿側の面にも弦紋、乳釘紋や a 1 類鑿菱紋などを施す。二里頭期の II 式に比べると、腹部は膨らみを増し、頸部も前後幅を増す。i 類双柱を持つ。鑿は中央で細くくびれ、腹部肩につく。鑿に型持孔を持つものもある。

A 型 II 式 腹部がやや膨らみ、腹部高の通高に対する比率が増した型式。紋様は依然幾何学紋が主体である。柱帽の厚みの増した ii 類双柱を持つ。器身・鑿は厚みを増す。

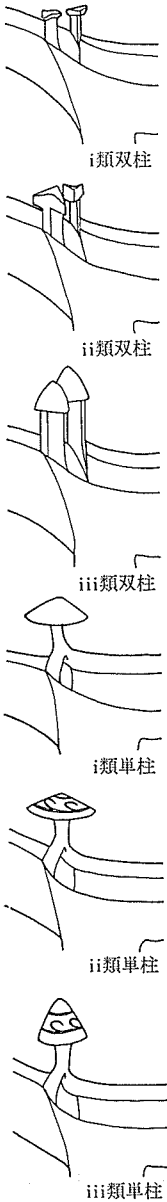
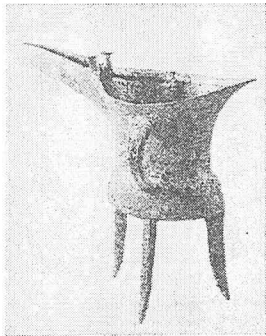
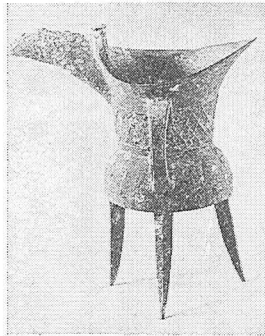


図4 爵の柱



1. A型Ⅰ式 高14cm



2. A型Ⅱ式 高14.6cm



3. A型Ⅲ式 高17cm



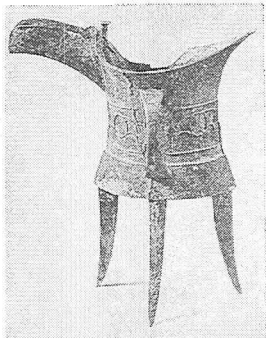
4. B型Ⅰ式 高14.5cm



5. B型Ⅱ式 高17.6cm



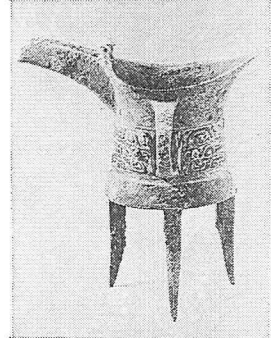
6. B型Ⅲ式 高21.2cm



7. C型Ⅰ式 高15.2cm



8. C型Ⅱ式古段階 高16cm



9. C型Ⅲ式 高18.5cm

図5 二里崗期の爵

(1: 白家庄C8M7, 2: 鄭州, 3: 鄭州, 4: 中牟黄店, 5: 白家庄C8M3, 6: 鄭州, 7: 楊庄, 8: 項城毛塚, 9: 白家庄C8M2)

A型Ⅲ式 頸部紋様帯にb1類饕餮紋を飾る型式で、腹部は下端径が上部径に近くなりあまり開かない。ii・iii類双柱ないしii類単柱を持つ。

B型Ⅰ式 頸部に円圈紋、腹部にa1類饕餮紋を飾る。ii類双柱を持つ。

B型Ⅱ式 腹部にb1類饕餮紋を、また、頸部にa2類表現の獸紋を飾るものが知られている。腹部はほとんど下方へ開かず、中央に最大径を持つものもある。器高が高くなる。ii類ないしiii類双柱を持つ。

B型Ⅲ式<sup>⑦</sup> 頸部・腹部にb2類饕餮紋を飾る。iii類双柱かiii類単柱を持つ。コレクション資料や地方出土青銅器には、iii類単柱を持ちb3類饕餮紋を飾る、より新しい型式がみられる。

C型Ⅰ式 頸部に、幾何学紋やa1類饕餮紋を飾るもの。i類双柱を持つ。

C型Ⅱ式 頸部にb1類饕餮紋を飾る。蓋下端が腹部肩につく。蓋側の面の紋様は、目がなく、饕餮紋をなさない。ii・iii類双柱やi類単柱を持つ古段階と、ii類単柱を持つ新段階とがある。

C型Ⅲ式 頸部にb2類饕餮紋を飾る。蓋側の面にも饕餮紋を飾り、蓋下端が頸部下方につく。iii類双柱を持つ例のみが知られている。

紋様の最も古拙で、i類双柱を持つA型Ⅰ式が最も古く、ii類双柱を持つA型Ⅱ式・B型Ⅰ式・C型Ⅰ式が次の段階と考えられよう。b1類饕餮紋が出現するA型Ⅲ式・B型Ⅱ式・C型Ⅱ式（古）は、第三番目の段階である。B型Ⅱ式は、A型Ⅲ式とB型の器形・紋様の要素が加わって発展したものと考えられる。さらに、B型Ⅲ式とC型Ⅲ式は、最終段階と考えられる。

ここでは、単柱爵と双柱爵では、柱の形態が異なる以外の他の要素は共通することが多いので、両者を小形式として分離しなかった。むしろ、鄭州付近の出土例でみる限り、単柱の柱帽の形態が、器形によって分けられた小形式と密接な関係がある。すなわち、i・ii類単柱はA型とC型に限られ、iii類単柱は主にB型に用いられるようである。こうした傾向

は、殷墟期の爵における特徴と一致するところがある。

(2) 罍(図7)

二里崗期の罍には、二里頭期の罍と同形態のものはなく、大きく次の三種類がある。

A型 器壁が底部まで緩やかに内彎する扁平な丸餅型の腹部と上方へ開く頸部を持ち、断面が楕円形の空足を持つ型式。

B型 底部との境が明瞭に屈曲する底面の平らな饅頭型の腹部と、上方へ開く頸部を持ち、断面が三角形の空足を持つ型式<sup>⑧</sup>。

C型 腹部以下が鬲状をなす型式。

さらに、B型を紋様帯構成の上から、頸部のみに紋様帯を持つ1類、頸部に饜餗紋・腹部に凹紋を飾る2類、頸部と腹部に饜餗紋帯を飾る3類とに、分類する。

つぎに、紋様帯の変遷と柱帽の変化に注目して、型式分類を行いたい。

二里崗期の罍の分類に際して、表明相は柱の変化を重視しており、下層期の罍は柱が短く柱帽が無紋であるのに対し、上層期には柱帽に凹紋を飾るものがあると述べている<sup>⑨</sup>。柱の型式の整理を試みよう(図6)。

i類 釘頭状の小さな柱帽を持つもの。頂部は平らである。

ii類 円錐形の柱帽を持つもの。頂部は無紋である。径はやや大きくなる。

iii類 円錐形で、丸みを帯びた柱帽を持つもの。

iv類 柱帽が円錐形で、頂面に凹紋を飾るもの。斜面は丸みを帯びている。

v類 丈の高い円錐形で、斜面が直線的なもの<sup>⑩</sup>。

iv類はv類に変化すると考えられる。iii類とiv類・v類では、前者が早く出現するようであるが、共存する時期がある。この分類をふまえ、型式変化を検討する。

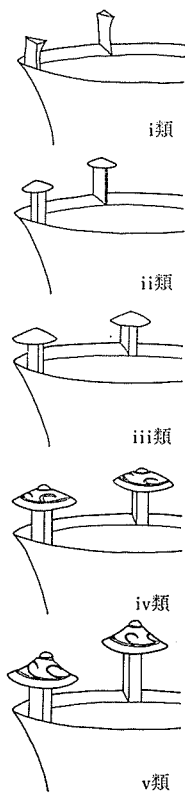
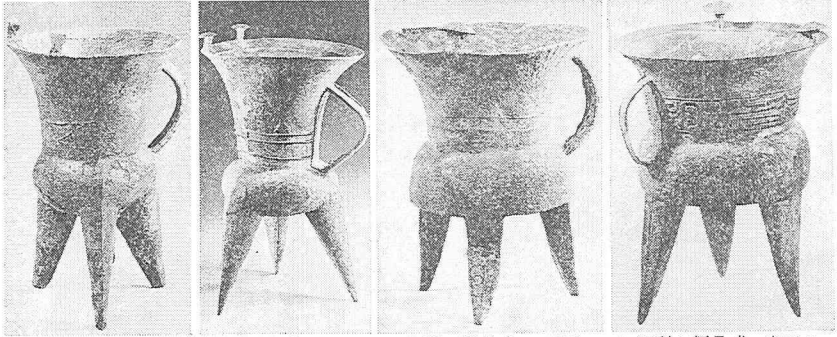


図6 柱の型

A型Ⅰ式 頸部に二本の弦紋をめぐらせ、その間に幾何学紋や乳釘紋を飾る型式。i類の柱帽を持つ。  
 A型Ⅱ式 ii類の柱帽が出現し、腹部に五個の円盤状突起を飾る型式。頸部の紋様はⅠ式とほぼ同様で、頸部を大きくのばした大型器が出現する。  
 B型Ⅰ類Ⅰ式 頸部には弦紋を施し、ii類の柱帽を持つ型式。  
 B型Ⅰ類Ⅱ式 主にb1類饜餮紋や獸紋帯を飾る型式。iii類柱帽を持つ。  
 B型Ⅰ類Ⅲ式 頸部紋様帯はⅡ式と同様であるが、iv類の柱帽を持つ型式。蓋は腹部中央につく。  
 B型Ⅱ類Ⅰ式 頸部に弦紋を飾り、腹部に五個の円盤状突起を飾るもの。柱帽はii類である。  
 B型Ⅱ類Ⅱ式 頸部にb1類饜餮紋帯と夔紋を飾る。腹部に凹紋を六個飾りiii類の柱帽を持つ古段階と、凹紋を七個飾りiv類の柱帽を持つ新段階とに分かれる。蓋下端は腹部肩につく。  
 B型Ⅲ類 頸部／器高の比率が大きくて器高の低い古段階と、頸部／器高の比率が小さくて器高の高い新段階とがある。前者は、頸部や腹部にa3類饜餮紋やb2類饜餮紋を飾り、iv類の柱帽を持つ。蓋側の紋様帯二箇所にも、紋様長を縮小した饜餮紋を飾る。後者は頸部・腹部ともにa3類饜餮紋を飾り、iv類の柱帽を持つものと、頸部・腹部ともb2類饜餮紋を飾り、v類の柱帽を持つものがある。蓋下端は腹部肩につく。C型は、頸部にa2類・b1類饜餮紋帯を施し、v類の柱帽を持つものが知られている。

以上の各型式の併行関係について考察する。i類柱帽を持つA型Ⅰ式は、最も古い。ii類の柱帽を持つA型Ⅱ式・B型Ⅰ類Ⅰ式・B型Ⅱ類Ⅰ式が併行する。B型Ⅱ類Ⅰ式とA型Ⅱ式は腹部に円盤状突





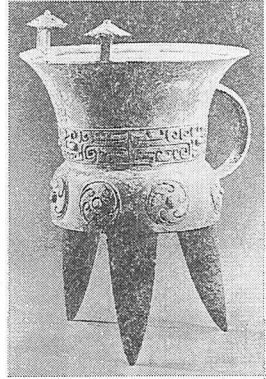
1. A型Ⅰ式 高20.8cm 2. A型Ⅱ式 高45cm 3. B型1類Ⅰ式 高20cm 4. B型1類Ⅱ式 高23.5cm



5. B型1類Ⅲ式 高27.8cm



6. B型2類Ⅰ式 高23.6cm



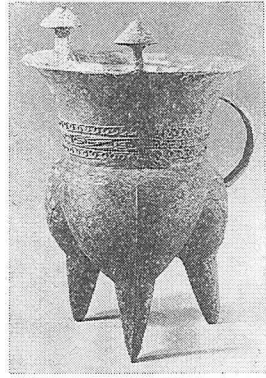
7. B型2類Ⅱ式新段階 高25cm



8. B型3類古段階 高25.2cm



9. B型3類新段階 高28.5cm



10. C型 高21.3cm

図7 二里崗期の罍

(1: 新鄭望京樓, 2: 開封, 3: 銘功路M2, 4: 望京樓, 5: 望京樓, 6: 登封袁橋, 7: 鄭州, 8: 二里崗, 9: 白家庄, 10: 鄭州)

起を飾る点が一致し、B型1類1式とB型2類1式は、頸部に弦紋を飾る点が一致している。iii類柱帽が現れb1類饗餞紋を飾るB型1類Ⅲ式とB型2類Ⅱ式古段階が、またiv類の柱帽を持つB型2類Ⅱ式とB型3類古段階が併行し、B型3類新段階は最も新しいと考えられる。

(3) 鼎と鬲(図8)

陶鬲は、殷代の土器の主要な器種の一つである。二里崗期の陶鬲は、当初は陶鬲を模して作られたが、頸部が発達し、独自に変化してゆく。口縁の境が鋭く屈曲し、口縁が水平に張り出す型式(A型)と口縁が緩やかに外反する型式(B型)の二種がある。A型について細分する。

A型1式 頸部に一本の弦紋のみを施し、袋足部にX字形の一重ないし二重突線を飾るもの。陶鬲の叩き目の境を模したのであろう。

A型Ⅱ式 頸部に二本の弦紋をめぐらせ、頸部紋様帯の発生する型式。袋足部には、一重ないし二重のV字紋を施す。

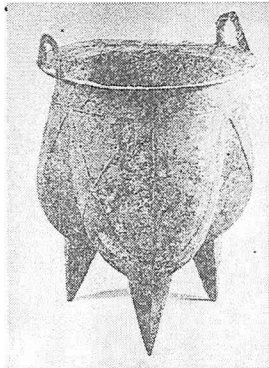
A型Ⅲ式 頸部に雷紋や饗餞紋などの紋様帯を飾る型式。

A型Ⅳ式 一段くぼめた明確な頸部を持ち、b1類饗餞紋を飾る型式。

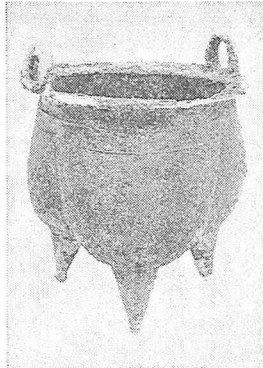
B型は、頸部に弦紋などの紋様帯を持つ。いずれも、袋足部に二重のV字紋を施す。通高三五cmのやや大型のものも含まれる。

鼎には、A型すなわち平面形が円形で円錐形の三足を持つ型式、B型すなわち板状の三足を持つ型式、C型すなわち大型で獸蹄足を持つ型式、D型すなわち平面形が方形である型式がある。A型には、頸部に三本の弦紋ないしは、突線による目申紋などを飾る古い型式(I式)があるが、その他は、b1類饗餞紋を飾る例がほとんど(Ⅱ式)で、B型・C型・D型には、a3類饗餞紋、b2類饗餞紋を飾るより新しい型式(Ⅲ式)がある。

頸部の紋様帯の表現が同様な鬲A型Ⅱ式と鼎Ⅰ式が併行し、鼎Ⅱ式は鬲A型Ⅲ式以降の型式と併行すると考えられる。



1. A型Ⅰ式 高19cm



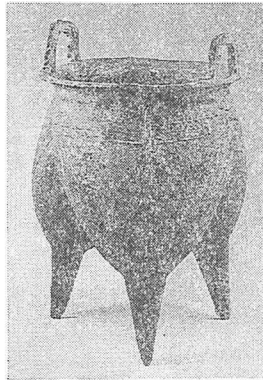
2. A型Ⅱ式 高15.6cm



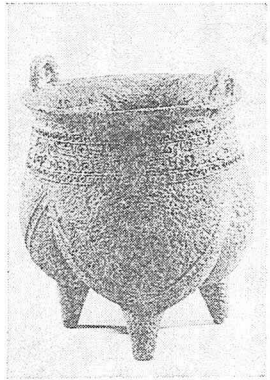
3. A型Ⅲ式 高18.3cm



4. A型Ⅳ式 高18cm



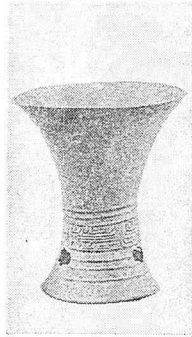
5. B型(大型品) 高35cm



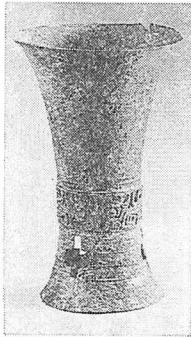
6. B型 高16.5cm

図8 二里崗期の鬲

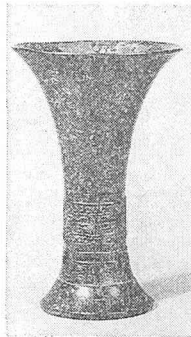
(1: 楊庄, 2: 京大文学部, 3: 望京楼, 4: 輝県琉璃閣M110, 5: 張碧南街, 6: 白家庄C8M3)



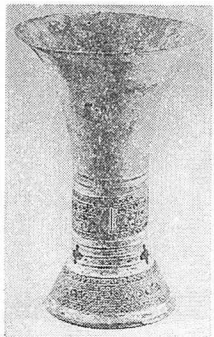
1. 1類Ⅰ式古段階 高13cm



2. 1類Ⅰ式新段階 高17.8cm



3. 1類Ⅱ式 高18.5cm



4. 2類Ⅱ式 高17.1cm

図9 二里崗期の觚

(1: 鄭州, 2: 銘功路M2, 3: 泉屋博古館彝178, 4: 琉璃閣50H LM100)

高B型は、高A型Ⅲ式以降に派生した型式と考える。

(4) 觚(図9)

觚には、A型すなわち細長いもの、B型すなわち太くて短いもの二種があるといわれている<sup>⑧</sup>。しかし、二里崗期のものは区別が比較的明瞭であるが、殷墟期資料においては両者の区別はつきにくくなるので、同様に変化する要素から一括して型式を設定する。

二里崗期の觚は、ほとんどが饕餮紋などの腹部紋様帯を持っている。斐明相は、腹部のみに饕餮紋帯を飾る型式が古く、脚部にも紋様帯を持つものが新しい型式と考えているが、殷墟期の觚には両方の装飾法がみられることから、腹部のみに饕餮紋帯を飾る1類と、腹部と脚部に饕餮紋などの紋様帯を持つ2類の二系統が併存したと考える。

1類Ⅰ式 腹部のみに幅の狭い紋様帯を持つ型式。三〜四本の脚部圏線が、脚部の斜面全体に施され、a2類の紋様が鑄出される型式が古く、最下端圏線と脚部端との間が開いていて、a2類やb2類の獣紋などを飾るものが新しいと考える。

1類Ⅱ式 脚端に無紋の肥厚帯を作り出す。器壁が厚くなり、脚部端に端面が出現する。脚部圏線は、二〜三本と減少の傾向にあり、脚部圏線の斜度は減少し、垂直に近くなる。

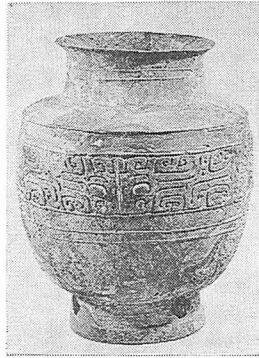
2類Ⅰ式 腹部にb1類饕餮紋を飾り、器壁が薄く、脚部圏線が三本である。

2類Ⅱ式 脚部端に端面を持ち、脚部圏線が二本で、圏線帯は垂直に近い。脚端に垂直な高台が作られているものもある。主にb2類の饕餮紋と獣紋を飾る。

脚部圏線帯がやや垂直に近くて器壁の薄いことから、1類Ⅰ式新段階と2類Ⅰ式が、また、脚部圏線帯がより垂直に近くて器壁の厚い1類Ⅱ式と2類Ⅱ式が併行すると考えられる。

(5) 尊(図10)

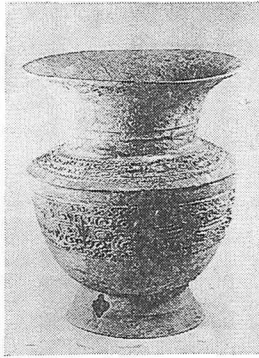
二里崗期の尊には、林巳奈夫の尊の分類<sup>⑨</sup>のうちの截頭有肩尊と円形尊があり、それぞれA型、B型と称することにする。



1. A型Ⅰ式 高24cm



2. A型Ⅱ式 高27.7cm



3. B型Ⅰ式 高25cm



4. B型Ⅱ式 高37cm

図10 二里崗期の尊

(1: 二里崗, 2: 白家庄C8M3, 3: 偃師塔庄, 4: 鄭州向陽回族食品廠H1)

B型Ⅰ式 肩部に犧首を飾らない型式。a 3類やb 2類の饜餮紋を飾る。  
B型Ⅱ式 肩部に立体的な犧首を鑄出す型式。

頸部と脚は徐々に高くなり、この型式においても、頸部圏線が二本から三本へ、脚部圏線が一本から二本へと変化している。脚部の型持は、十字形から円形ないしは方形に変わってゆく。

紋様の表現から、A型Ⅱ式(古)がB型Ⅰ式と、A型Ⅱ式(新)がB型Ⅱ式と同時期と考えられるが、資料数が十分ではないので、今後更に検討する必要がある。A型Ⅰ式、B型Ⅰ式に属する各一点は、型持が、饜餮紋の中心線(一塊の外型の

A型Ⅰ式 腹部のみに幅の広いb 2類饜餮紋帯を飾る型式。

A型Ⅱ式 腹部の饜餮紋のほか、肩部に幅の狭い獸紋帯を飾る型式<sup>⑩</sup>。b 2類表現をとる古段階と、b 3類表現をとる新段階がある。

A型Ⅲ式 肩部に犧首を飾る型式<sup>⑪</sup>。

Ⅰ式は、頸部に二本の圏線を飾るのに対して、Ⅱ式は三本の圏線を飾っている。また、脚も徐々に高くなってゆく。

現在知られているB型の例は、いずれも肩上部に獸紋帯を持つ。

中央）とほぼ一致するのに対し、他例は、鑄型の合わせ目に一致する。<sup>10)</sup>

(6) 蓋

二里崗期の蓋を、斐明相は、頸部に弦紋を飾る下層期のものと、饗簋紋を飾る上層期のものに分けている。<sup>11)</sup> 私もこれに従い、前者をⅠ式・後者をⅡ式とする。頸部がのび、またドーム状の蓋部も高さを増して、上部に飾られる饗簋紋が複雑化してゆくようであるが、出土例は極めて少ない。

- ① 第一章注⑨前掲文献、一一四—一一五頁。
- ② 第一章注⑨前掲文献、一一五頁・第一章注⑩前掲文献、四五一—四七頁。
- ③ 第一章注⑩前掲文献、四五—四七頁。
- ④ B型のなかで、底部がやや突出したものをB型とする。この型式に属するものとして、東京大学文学部蔵品や銘功路M4:1を考えている。これらは、底部に范線がないことが共通する。銘功路M4爵は、頸部には雷紋が、腹部にはb1類饗簋紋が飾られているのに対し、東大蔵爵は頸部に幾何学紋を飾るのみである。
- ⑤ 第一章注⑩前掲文献、三八頁。
- ⑥ 林巳奈夫「殷周時代の幾何学的な紋様」、二について「『東方学』第二十六号、一九六三年」による呼称にしたがった。
- ⑦ 青銅器は、饗簋紋帯を最も強調されるべき重要な部位に飾るのに対し、その他の紋様を飾る部位はそれほど重要ではないと考えられる。Ⅰ・Ⅱ式とⅢ式では腹部と頸部に対する工人の意識が異なっていたのであろう。飯島武次は、両者を別系統としてあつかっている（第一章注④前掲文献、六頁）。
- ⑧ 頸部と腹部が直線的につながる筈が、コレクション資料と、盤龍城遺跡の出土例にみられ、形態や紋様はB型Ⅰ類に最もちかい。盤龍城

の報告では、口が大きくひろき、底部が大きく張り出すもの（本稿でいうB型）につく型式としている（第一章注⑨前掲文献、一六頁）。しかし、鄭州市の遺跡での発掘例はなく、地方型青銅器である可能性がある。ここではとりあげない。

- ⑨ 第一章注⑩前掲文献、四三—四五頁。
- ⑩ コレクション資料や、殷墟出土器には、vi類 罍紋を飾る截頭円錐形柱帽をもつものもみられ、それは、b3類饗簋紋を飾ることから二里崗期にまで遡りうるものかも知れない。いずれにせよ、截頭円錐形柱帽は、v類が発達したものであろう。そして、殷墟期には、iv類の系譜をひく円錐形柱帽をもつものと、截頭円錐形柱帽をもつものとの両系列が存在する。
- ⑪ ヴァルストラッヒホルトも、同様に考えている。(U. Linert, Typology of the TING in the Shang Dynasty, A Tentative Chronology of the Yin-shu Period, *Publikationen der Abteilung Asian, Kunsthistorisches Institut der Universität Köln*, 1979, pp. 185-190.)
- ⑫ 第一章注⑩前掲文献、二〇二頁。A型Ⅰ類には、リニエルトや鄒衡のいう「盆型」(直口)と「罐型」(口すぼまり)が存在するようであるが、資料数も少なく、その区別は明確でないので、ここでは分類し

ない。

⑬ 張長寿は両者が同一墓にセットになって用いられていることが多いと指摘している。鄒衡や林巳奈夫は、こうした考え方から甗を分類している。(張長寿「殷周時代の青銅容器」『考古学報』一九七九年第三期)二七七頁。第一章注⑨前掲文献、二一五頁。鄒衡「試論殷墟文化分期」『北京大学学报』人文科学、一九六四年第四期・第五期。『夏商周考古学論文集』、文物出版社、北京、一九八〇年所収)五三―五五頁。

第一章注⑩前掲文献、二二三頁。

⑭ 第一章注⑪前掲文献、四五頁。

⑮ 第一章注⑫前掲文献、二一六頁。

⑯ この型式の鬘鬘紋より後、鬘鬘の尾に接して、「鳥首龍紋」が表現されるようである。この組合せに関しては第二章注⑫前掲文献二一―一七頁参照。

⑰ さらに、腹部鬘鬘紋帯上に目申紋を飾る型式がみられる。ところで、A型のうち、肩部に饗首を鋳出すものは、紋様帯の変化等から考えあわせても、饗首を飾らないものより遅れて出現したと思われる。しか

## 五 各器種の併行関係と分期

### (1) 青銅器の各器種の併行関係

ここではまず、前章まで検討してきた各器種の変遷をもとに、型式の特徴の共有関係をみつけることによって、器種間の併行関係を考察し、青銅器の分期を行う。

二里頭期においては、爵と斝が存在することを述べた。斝は、頸部と腹部が段差によって明瞭に分かれている点、が爵Ⅱ式と共通するので、両者は併行する可能性が高い。そこで、爵Ⅰ式の時期と、斝・爵Ⅱ式の時期に仮に分けよう。

し、殷墟出土例を検討すると、饗首を飾るものと飾らないものの二種が存在し、しかもそれらは、紋様表現や紋様帯数等の要素から、確実に殷墟期に属している。B型では例外なく饗首を鋳出すのに対して、A型尊では饗首の採用は選択的であったといえよう。

⑱ 二里頭期の甗のうちb類表現の紋様を飾るものほとんどは、十字鏤孔が二つの外型のうちの一方の合わせ目両側と、もう一方の鋳型の中央(鬘鬘紋中心軸)付近の合計三個ある。殷墟期の甗は十字鏤孔が二個で、外型の合わせ目が「十」字の縦軸と一致する。おそらく、十字鏤孔が鬘鬘紋の中心のある器の正面から見えないように、改良したのであろう。甗Ⅰ類Ⅰ式のうち、a2類鬘鬘紋を飾る一群(古)の一部には、十字鏤孔がないし四個設けられたものがある。甗には、二系統の技法が存在しており、殷墟期に最終的に技法が統一されたと考え、尊の十字鏤孔の位置の変化も、甗と同様に技法上の変化があったために生じたと考えられよう。

⑲ 第一章注⑬前掲文献、四三頁。

二里崗期の青銅器については、これまでに述べてきた各器種の変遷と併行関係の中で、器形の面からも、第二節で述べた紋様表現の出現順序が正しいことが示された。中でも、原型を用いて外型に紋様を捺捺するb類饗餮紋の出現は大きな画期であり、これを持つ各器種の各型式もまた、同時期に出現したと考えてよいのではないだろうか。各器種のうち代表的なものを挙げると、爵A型Ⅲ式・罍B型Ⅰ類Ⅱ式・高A型Ⅲ式・鼎A型Ⅰ類Ⅱ式・觚Ⅰ類Ⅰ式などで、これらは併行すると考える。これ以前の段階では、

第一期 弦紋や乳釘紋などの第二段階の紋様が主で、柱帽も釘頭状のものしかない。爵A型Ⅰ式・罍A型Ⅰ式。

第二期 第三段階の紋様帯を持ち、円錐形の無紋の柱帽が出現する。爵A型Ⅱ式・罍B型Ⅰ類Ⅰ式。

b類饗餮紋の出現以降では、

第三期 先述の各型式。ただし、爵と罍は、円錐形柱帽を持ちながら凹紋を飾らない古段階（爵C型Ⅱ式古段階・罍B型Ⅰ類Ⅱ式）と凹紋が出現する新段階（爵C型Ⅱ式新段階・罍B型Ⅰ類Ⅲ式）に細分できる。

第四期 b2類・b3類饗餮紋を飾り、饗餮・獸紋帯が増加する。罍や爵には紋様の割り付けを工夫し、蓋の両脇にも饗餮紋を飾るものも出現する。爵B型Ⅲ式・C型Ⅲ式・罍B型3類・觚2類Ⅱ式・尊A型Ⅰ式・B型Ⅰ式以降。また、非常に例が少ないが、b2類饗餮紋を飾る卣や盤もこの時期のものであろう。

このような、いくつかの併行する可能性のある型式をもとに、同一器種の中での併行関係をも加味して、編年図を作成した（図12）。罍や鼎は、他の器種と共通する要素が乏しいので、綿密な併行関係を押えるにはいたらなかったが、青銅器について、二里崗期はおおよそ四つの時期に分けられよう。第四期は、b2類饗餮紋を飾る古段階と、b3類饗餮紋を飾る新段階とに細分される可能性もある。

## （2） 土器編年との対応

二里頭期は、二里頭遺跡における土器の層位資料によって、一九七四年の報告以来、四つの時期に分けられている。<sup>①</sup>分



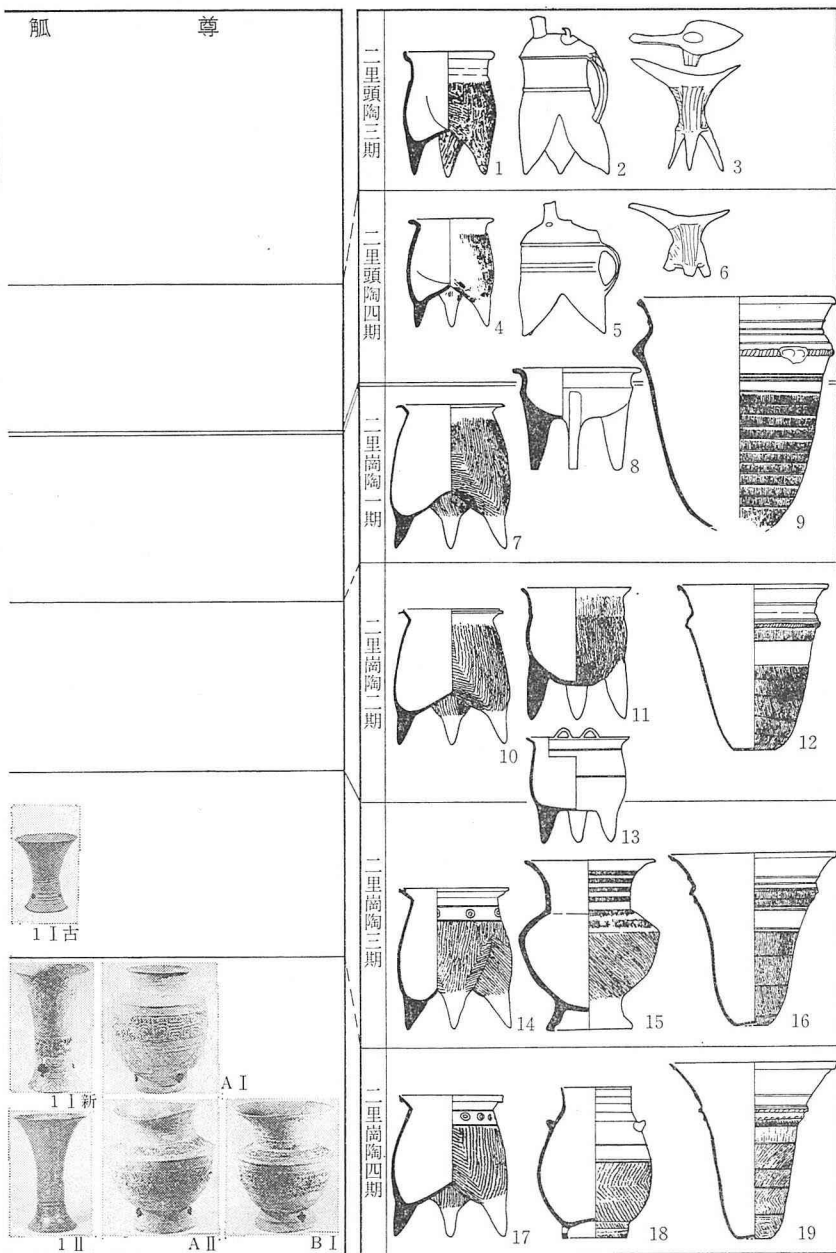


図11 土器編年図 (9・12・16・19: 1/6, その他1/2)



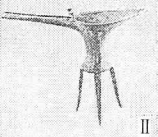
























	爵	罍	鬲
一里頭銅一期	 Ia  Ib		
一里頭銅二期	 II		
一里崗銅一期	 A I	 A I	 A I
二里崗銅二期	 A II	 B I	 C I
		 A II	 B 1 I
		 B 2 I	 A II
二里崗銅三期	 A III	 B II	 C II 古
		 B 1 II 古	 B 2 II 新
			 A III
二里崗銅四期	 B III	 C III	 B 3 古
		 B 1 III	 B 2 III
		 B 3 新	 A IV

図12 青銅彝器編年図

期は、最初は層位に基づいて行われたが、灰坑や墓葬の良好で豊富な一括資料が増加し、従来の案に矛盾がほぼないことが明らかになっていたので、ここではその案に従う。

一方、二里崗期は、二里崗遺跡の層位資料や灰坑の切り合い関係に基づいて、大まかに「下層期」と「上層期」に分けられている<sup>②</sup>。しかし、各期の土器の中には、細分の可能な器種も多い。さらに、鄒衡は、鄭州市に存在する洛達廟遺跡・南関外遺跡<sup>④</sup>などの二里頭期に属すると考えられる時期の資料と、その後の殷墟期の直前の段階の資料までを含めて、八組四段階に分期した<sup>⑤</sup>。そして、二里崗下層期の一部(第Ⅱ組)を、「先商期」(二里頭期)、「夏文化期」の新段階にあて、二里崗下層期の一部と二里崗上層期を、四つに細分し(第Ⅲ～Ⅵ組)、「早商期」の前・中葉にあてている。

鄒衡の論文以降に発表された灰坑の一括出土資料を含めて私も土器分期を検討してみた。それによると、陶一期 $\parallel$ C1H9、陶二期 $\parallel$ C1H2甲・C1H17、陶三期 $\parallel$ C1H2乙、陶四期 $\parallel$ C1H1・商城東南H4・C1H13・商城東南H3等の出土資料で代表される各期に分期できる(図11)。すなわち、「下層期」「上層期」を、各々二期に細分したことになる。それは、鄒衡の第Ⅱ組 $\setminus$ 第Ⅴ組にほぼ相当する<sup>⑧</sup>。

なお、私のいう陶一期(鄒衡の第Ⅱ組)の大口尊・鬲・鼎などは、二里頭期第四期のもと酷似しており、鄒衡の他にもこれらの時期は併行すると考える研究者がいる<sup>⑨</sup>。しかし、従来より二里崗期とされ、陶一期に属するC1H9や南関外遺跡中層では、鬲状の体部を持つ罍や装飾を持つ深盆が出土している。これらは、鄭州付近の二里頭期併行の遺跡でも見られなかった新しい器種で、二里崗期には普遍的にみられる器種である。従って、陶一期以降を、二里頭期とは器種のセツトに明瞭な差のある新しい時期すなわち「二里崗期」として区別したい。

次に、青銅器と土器の併行関係を、器形や装飾の共通性に基づいて考察する。

青銅器各器種は、土器を模倣して作り始められたと考えられる。そして、青銅の彝器が独自に発展を始めると、今度は青銅器を模倣した仿銅陶器が出現する。土器と青銅器が器形や装飾の上で相互に影響しているものを挙げてみよう。

二里頭Ⅰb式以降の銅爵は、Ⅰa式に比べて流尾が長く、頸部と腹部の屈曲が明瞭になってゆくが、これは、二里頭二期から三期、四期への陶爵の変化の傾向と似ている(3・5)。

二里崗期の陶鼎は、陶二期になって板状足を持つ型式(8)から銅鼎と同様の円錐形足を持つもの(11)へと変化し、さらに、器面を磨き両耳をつけた仿銅陶鼎(13)が出現する。従って、銅鼎の初現(Ⅰ式)は陶二期であろう。一方、銅鬲は、Ⅱ式より頸部紋様帯が発達すると考えられた。陶鬲においては、陶三期より頸部に同心円紋帯を飾る型式(14)が通有となるから、頸部紋様帯の確立した銅鬲Ⅲ式は、陶三期に併行すると考えられる。

銅尊B型は、器形が硬陶尊(15)によく似ている。硬陶尊は江南地方で発達した陶器で、鄭州市や殷墟では青銅器と共に副葬品として発見される例も多いため、当時、珍重されていたのではないかと考えられる。私は、これを銅尊B型の祖形と考える。硬陶尊は二里崗陶三期以降にみられるから、銅尊B型の出現は陶三期であろう。

仿銅陶器や饗餞紋を飾る土器の共存関係をみると、北二十七路遺跡で、仿銅陶尊(A型Ⅱ式に相当)が四期の陶鬲と同一層から出土しており、b1類饗餞紋を飾る陶簋が、大口尊等の陶三期土器と同一層から出土している。経五路遺跡では、三期の大口尊の出土した灰坑の上の層から、b3類饗餞紋を飾る陶簋が四期の罍や鬲とともに出土している。

林巳奈夫は、銅尊A型の祖形を二里頭期陶大口尊(9)に求めている。また、陶盃(2・5)は、二里頭期の墓からの出土例が多数みられるにもかかわらず、二里崗期以降、ほとんど見られない。一方、銅盃はすべて二里崗期に属すると考えられている。これらの青銅器の祖形土器との時期的隔たりは、今後検討を要する課題である。

### (3) 共存関係による検討

次に、墓葬などの一括出土品によって、青銅器相互の、及び青銅器と土器との併行関係を検討する。

墓ごとの出土青銅器の型式と、共存土器の時期を一覧表にした(表1・2)。二里頭期には、爵Ⅰ式は三期～四期の土器と、また爵Ⅱ式は四期の土器と共存するが、爵Ⅱ式が三期の土器と共存する例はない。したがって、爵Ⅰ式が三期に、爵

表1 二里頭期の青銅彝器及び土器の共伴例

出土遺構	銅器分期		土器分期	文献
	一期	二期		
二里頭Ⅶ T22③	爵Ⅰ a		三期土器層	(1)
二里頭Ⅴ M K3	爵Ⅰ b		三期盃	(2)
二里頭Ⅵ M6	爵Ⅰ a		四期盃	(3)
二里頭Ⅵ M9		爵Ⅱ・斝	四期盃・大口尊	(3)
二里頭Ⅲ M2	爵Ⅰ b	爵Ⅱ	四期盃	(4)
二里頭Ⅵ M11		爵Ⅱ	四期盃	(3)

表2 二里崗期の青銅彝器及び土器の共伴例

出土遺構	銅器分期				土器分期	文献
	一期	二期	三期古	三期新		
東里路 C8M32	爵 A1 I	斝 B1 I				二期斝・鬲 (1)
銘功路 M2		爵 A1 II 斝 B1 I	爵 C II 古? 鼎 A II	觚 B1 I 新		三期鬲 (2)
張砦南街				鬲 B(大) 鼎 C		三期大口尊・鬲 (3)
向陽回族食品廠 H1					鼎 B・C・D 觚 2 II 尊 A III・B II	四期大口尊 (4)
北二七路 M2		斝 B1 I 爵 C I	斝 B1 II	觚 B1 I 新		上層期硬陶尊 (5)
北二七路 M4		爵 B' ?				四期鬲・斝 (5)
銘功路 M4			觚 A1 I 新	爵 B'		四期? 鬲 (2)
北二七路 M1		斝 B1 I	爵 C II 古 斝 B1 II 鼎 A II	斝 B1 III 觚 A1 II		上層期灰坑を切る (5)
東里路 M39		鼎 A I			斝 B3 古	(1)
白家庄 C8M3		斝 A II		爵 B1 II 鬲 B 斝 B2 II 新 觚 B1 I	觚 A2 II 尊 A II 古	(6)
白家庄 C8M2					爵 C III 尊 A II 新 斝 B3・盤	(6)

Ⅱ式が四期に併行する可能性が強い。また、二里崗期では、銅二期の青銅器が陶二期の土器と共伴し、銅三期の青銅器が陶三期の土器と共伴する。そして、銅四期の青銅器が陶四期の土器と共伴している。反対に、銅三期の青銅器が陶二期の土器と、銅四期の青銅器が陶三期の土器と共伴する例は無い。このことは、土器と青銅器の影響関係から考察した併行関係と一致し、銅器の四分期が土器の四分期とほぼ対応するものであると考える。また、特に多数の青銅器を副葬する墓では、その青銅器に時期幅が認められ、二里崗期にも、青銅器には伝世があったと推定される。ただし、青銅器と土器との共伴例はまだ例が少ないので、将来、資料が増加すると共に、再検討してゆくことが必要である。

- ① 中国科学院考古研究所二里頭工作队「河南偃師二里頭早商宮殿遗址発掘簡報」(『考古』一九七四年第四期)。
- ② 鄭州市文物工作组「鄭州市殷商遗址地层關係介紹」(『文物參考資料』一九五四年第二期)。
- ③ 河南省文化局文物工作队第一隊「鄭州洛達廟商代遗址試掘簡報」(『文物參考資料』一九五七年第十期)。
- ④ 河南省博物館「鄭州南関外商代遗址的發掘」(『考古學報』一九七三年第一期)。
- ⑤ 第一章注⑨前掲文獻、一〇六一—一四頁。
- ⑥ 河南省文化局文物工作队「鄭州二里崗」中国田野考古報告集考古學專刊丁種第七号、科学出版社、一九五七年。
- ⑦ 河南省文物研究所・鄭州市博物館「鄭州新發現商代窖藏青銅器」(『文物』一九八三年第三期)。
- ⑧ 第四期は、鬲・盆・豆に新旧の型式がみられるので、さらに二期に細分しうる可能性もある。細分したとすると、その新段階は、鄭衛の第Ⅵ組に相当するかもしれないが、その他の器種についての型式変化
- ⑨ 高煦「略論二里崗期商文化的分期和商城年代—兼談其与二里頭文化的關係」(『中原文物』一九八五年第二期)。
- ⑩ 安金槐は、鄭州で出土する硬陶尊のなかには、鄭州でつくられたものもあると考えた(安金槐「談談鄭州商代的幾何印紋硬陶」『考古』一九六〇年第八、九期)が、湖北省盤龍城遺跡では、鄭州よりはるかに多数の例がみつかっており、陳賢一は、この地での独自の發展を指摘している(陳賢一「盤龍城商代二里崗期的墓葬陶器初探」『中國考古學會第四次年會論文集』一九八三、文物出版社、北京、一九八五年)。また、図には、圈脚をもつ盤龍城出土例を挙げたが、鄭州市内では、圈脚をもつ例は未発見のようである。
- ⑪ 鄭州市博物館「鄭州商代遗址發掘簡報」(『考古』一九八六年第四期)。
- ⑫ 林巴奈夫「中国古代の酒甕」(『考古學雜誌』第六五卷第二号、一九七九年)九頁。

## 六 二里頭期・二里崗期の鑄造技術の変革

青銅器には、鑄型の合わせ目(范線)がみられることが多く、バーナードはこの范線の観察を通じて、精力的に鑄型構造を復原している。<sup>①</sup>氏にならない、范線に基づいて鑄型構造の変化を考察してみよう。

バーナードは、二里頭期の爵三点を實際に観察し、いずれも底面に范線がなく、底范が一塊の鑄型として独立していたことを指摘した。<sup>②</sup>また、二里頭期の爵には、足外面中央に范線を持つものと持たないものがあることを指摘した。そして、足外面に范線を持たないものは、器身の外型と同様に足の外面鑄型も二塊から成り長軸上に合わせ目を持っていたのに対し、足外面に范線を持つものは足の外面鑄型が三塊から成っていたのではないかと考えている。前者においては器身の外型と足の外面鑄型が一体であったのに対して、後者においては器身と足の外型は分離していた可能性がある。すなわち、二里頭期の爵外型は、側范(二塊)と底范を用いた段階(図13-1)から、器側范(左右二塊)と足外面鑄型(三塊)および底范とを用いた段階(図13-2)へと変化したことになる。ただし、後者の想定では、鑄型の構造がかなり複雑なものになってしまう。更に検討を要する。氏が実際に観察した資料のうち、前者にあたる資料は筆者のI b式に属し、後者にあたる資料はII式に属する。

二里頭期の爵の器身には鑿中心軸を通る面に直交する軸上に范線がみられる(図14-1)が、足は中心軸がこの上に乗らず、中央范線も見られない。<sup>③</sup>爵同様に器身と足がひとつながりの二塊の外型と底范より成る鑄型で鑄造された可能性がある。

二里崗期の爵は、底面にY字形の范線がみられ、この延長上に足外面の中央范線があることから、足以下がY字形に交わる三塊の鑄型から鑄造されていたとわかる(図13-3)。二里崗期に入った段階で、独立底范はほぼ用いられなくなったのである。<sup>④</sup>爵の器身の外型は依然として長軸方向に合わせ目が設けられていて、器身の范線と足の范線は必ずずれている。

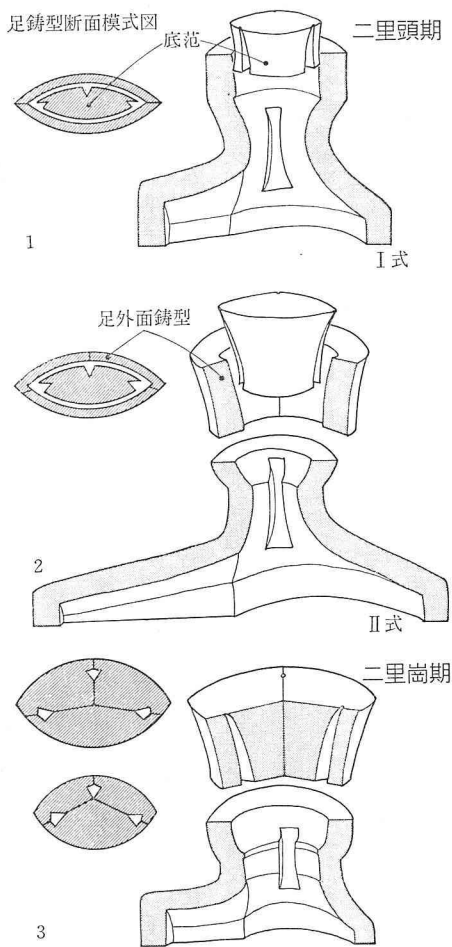


図13 爵の鑄型構造の変化（模式図）

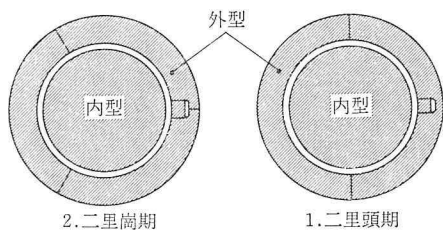


図14 罍の鑄型構造の変化（頭部断面図）

すなわち、器身の外型と足の鑄型は、分離していたのであろう。

二里崗期の罍は、器身・足ともに断面が中心角一二〇度の扇形を呈する外型を用いて鑄造された（図14 i 2）。罍A型は、腹部と底部の境の范線がみられないことから、器身から足までが、ひとつながりの三塊の外型で鑄造されていたと考えられる。これに対して、B型は腹部と底部の境の屈曲が明確であり、しかも足が内方へわずかに入りこんでいることから、器身の外型と足の外型はこの屈曲を境に分離していた可能性がある。すなわち罍は、二里頭期⇨一文字に交わる二塊の外型と底范⇨二里崗期A型⇨Y字形に交わる三塊の外型⇨B型⇨器身・足が分離した六塊の外型の順に、鑄型構造が変化してと考えられよう。

鬲・罍C型・鼎A型もまた、底部に一二〇度に交わる范線がみられるので、二里崗期以降の罍と同様、三塊の外型によ



って鑄造されたといえよう。南関外遺跡出土の鬲の外型<sup>⑤</sup>は、器身部と足部が分離せず、側方に湯口・湯の上がりが設けられている。ただし、湯口の方向が、全期を通して同じであったかどうかは、不明である<sup>⑥</sup>。甗C型・鼎A型1類もまた、器身と底部や足の境の范線はみられないので、外型は器身の部分と足の部分がひとつながりであったといえる。一方、二里崗四期以降にみられる大型の鼎C型やD型は、器身なかに水平方向の范線がみられるので、上半と下半に分割された外型が用いられたと考えられる。底范も独立していたようで、さらに、鼎D型の足が後鑄法によっているという観察結果が報告されている<sup>⑦</sup>。大型の器を鑄造するために、他の型式とは異なった新しい技術が用いられたようである。

圈脚を持つ器の鑄造には、三足器とはまた異なった鑄型構造が必要である。すなわち、三足器の鑄型は、内型一塊を支えればよいのに対し、圈脚器は、上下二塊の内型を支える構造が必要だからである。鑄造時に上方になる圈脚部の内型の支えとして、十字形(十字鏤孔)や円形・方形の型持が用いられた。觚は二塊の外型を用いているが、これより出現のおくれると考えられる尊・盤は三塊、卣は二塊の外型を用いている。

型持は、二里頭期爵の蓋や腹部に用いられたこともあったが、三足器では基本的に不必要なものであった。ところが、泉屋博古館蔵爵(彝85・B型I類II式)や出光美術館蔵斝(B型I類II式)には、底部中央に銅製の型持が用いられている<sup>⑧</sup>。中国の調査報告では全く記載がないが、あるいは、二里崗三期に三足器も圈脚器同様、型持の技術をとり入れたのかも知れない。

① N. Barnard, *Bronze Casting and Bronze Alloys in Ancient*

*China, Monumental Series Monograph, XIV, Melbourne, 1961.*

② 第一章注⑨前掲文獻、三五五—三六七頁。

③ 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊「一九八四年秋河南偃師二里頭遺址發見的幾座彝葬」(《考古》一九八六年第四期)圖4および圖

版七一・二より推定した。

④ ただし、わずかに底部の突出したB型爵には、底面・足の中央の范線がみられないので、この型式のみが、二里頭期の技術伝統を継承して独立底范を使用して作られていた可能性がある。

⑤ 河南省文化局文物工作隊第一隊鄭州商代遺址的發掘」(《考古學報》

一九五七年第一期、図版七—八。第一章注⑩前掲文献、図20。

⑥ 盃も、鑿の外側中央部に湯口状の突起がみられるので、側方から溶銅を流しこんだという意見がある。

⑦ 裴明相「鄆州商代銅方鼎の形制和鑄造工藝」《中原文物》一九八一年特刊。ただし、河南省博物館「鄆州新出土的商代前期大銅鼎」《文

物》一九七五年第六期）では、兩耳が先鑄法、四足が後鑄法によるとしている。

⑧ 近藤喬一「青銅器の製作技術」《樋口隆康編『古代史究掘』5「大陸文化と青銅器」、講談社、東京、一九七四年）一一六頁。

## 七 むすびにかえて

二里頭期・二里崗期の青銅容器は、銅飾板や玉器・銅戈などとともに、特定の墓に副葬されることが多いことから、当時の社会では特殊な意味をもつものであったことは明らかで、殷墟期や周代と同様に、すでに重要な祭器であった可能性は高い。また、仿銅陶器も盛んに作られている。前述の編年案が正しいとすれば、二里頭三期（以下は銅器編年による分期を指す）に爵の鑄造が始り、続いて罍が、さらに二里崗二期には、鬲・鼎・盃などの三足器が鑄造され始め、二里崗三期には觚が、また、二里崗四期には大型の尊・盤・卣などの器種が出現する。このように、青銅彝器の種類は二里崗二期以降、急速に揃ってゆくのであるが、青銅彝器の種類が揃っていなかった時期に、必ずしも「祭り」に用いる器種が限られていたわけではないだろう。なぜなら、青銅彝器は、二里頭期から用いられている各種の土器を祖形として作り始められたと考えられ、二里崗期に最終的に整った青銅彝器のセットも、実は二里頭期にすでに存在した土器のセットの一部にあたるからである。しかし、なぜ、このような順に各器種が青銅器に置き換わっていったのであろうか。その理由として、次のようなことが考えられないであろうか。

まず、技術的な変革を経て、徐々に複雑な器形の鑄造が可能になったことがあげられる。最初に出現した爵は、平面形が扁平で、二塊の外型で鑄造することができる。事実、二里頭期の爵Ⅰ式と罍は、器身・足ともに二塊の外型で鑄造された可能性がある。二里崗期の中心角百二十度で交わる三塊の外型による鑄造技法の出現によって、平面形が円形にちかい

三足器(罍・鬲・鼎など)が、また器身・足部の分離した外型の出現によって、平底を持つ器(爵や斝B型)の造形が、より確実なものとなった。さらに、鑄型の分割の技法が一層進められ、後鑄法も開発されたことによって、大型の鼎C型やD型が出現する。また、二里崗三期には、圈脚器の鑄造が開始され、型持の技術が進展したと考えられる。

次に視点をかえて、各器種の機能と青銅という材質との関係を考えてみよう。すなわち、内容物を温める機能を持つ三足器が、まず作られ始めたことは、金属は伝導率が高く、加熱に適していることに由来するのかもしれない。二里崗二期以前の三足器では、煤が付着するなど、加熱痕のみられる例が大多数である。他方、主要な三足器が揃う二里崗二期以降、同一器種のなかで、器形の異なる小形式や装飾構成の異なる系統が分化してゆく。そして、二里崗三期に原型を用いた饗餞紋が出現したのち、より複雑な紋様が飾られ、柱帽などの装飾が発達していった。加熱という機能を持たない圈脚器は、まさに、こうした時期になって出現した。この時期以降の三足器で加熱痕のみられる報告例もまた、非常に少ない。すなわち、二里崗三期以降、鑄出される紋様のシャープさや質感といった青銅の持つ新たな面が注目され、いいかえれば、青銅彝器は徐々に本来の機能ではなく、器形や装飾といった外見的なものに重要な意味が付加され始めたといえるのではないだろうか。それにつれて、各器種の器表全体が紋様で覆われるようになる。

このように、二里頭期に生まれた青銅彝器は、二里崗期を経て、技術の進歩や青銅の利用観点の変化などの要因が相互に作用することによって、器形・器種構成が変化したり、紋様や装飾に新たな意味が加えられたりして、大きく発展をとげたのである。次の殷墟期を迎えると、こうした青銅彝器の変化はますます助長され、鑄造技術や装飾もいよいよ複雑なものとなり、器種や小形式も増加する。今後、本稿で述べたような観点をふまえて殷墟期の青銅彝器編年を二里頭期・二里崗期の青銅彝器の編年につなぎあわせ、その変遷を総合的に考察することによって、殷代の青銅彝器の発達状況はより明確になると考える。さらに青銅彝器の空間的な広がり方、ひいては、青銅彝器の器形や紋様の系譜関係から推測される青銅器工人の動きなどに対する洞察をも深めてゆけば、青銅彝器をめぐる社会の様相が一層明らかになることであろう。

図表出典

図1 爵 泉屋博古館 彝85、難波実測。

尊 第五章注⑦前掲文献、図二一。

図2 第一章注⑭前掲文献、図一—10・2・3、図二—2・4・1。

図3 1~3 《河南(1)》1・2・9。

4 第三章注③前掲文献、図版七—2。

図5 《河南(1)》18・61・63・83・30・65・60・102・22。

図7 《河南(1)》91・51・12・94・90・85・49・55・54・56。

図8 1・3~6 《河南(1)》42・88・104・36・26。

図9 2 京大文学部3412、難波撮影。

1・2・4 《河南(1)》69・15・10。

3 貝塚茂樹ほか『中国の美術』第五卷（淡交社、京都、一九八二年）、図3。

一九八二年）、図3。

図10 1~3 《河南(1)》73・33・99。

4 中日新聞社『黄河文明展図録』、一九八六年、34。

図11 1 中国科学院考古研究所二里頭工作队、「河南偃師二里頭早商官殿遗址発掘簡報」《考古》一九七四年第四期。

2 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊「河南偃師二里頭遗址発掘簡報」《考古》一九六五年第五期。

3・5・6 中国社会科学院考古研究所二里頭隊「一九八〇年秋河南偃師二里頭遗址発掘簡報」《考古》一九八〇年第三期。

4 中国社会科学院考古研究所二里頭隊「一九八〇年秋河南偃師二里頭遗址発掘簡報」《考古》一九八〇年第四期。

3・5・6 中国社会科学院考古研究所二里頭隊「一九八〇年秋河南偃師二里頭遗址発掘簡報」《考古》一九八〇年第三期。

4 中国社会科学院考古研究所二里頭隊「河南偃師二里頭二号宮殿遗址」《考古》一九八三年第三期。

7・8・10~14・16~19 第五章注⑥前掲文献。

15 湖北省博物館「一九六三年湖北黃陂盤龍城商代遗址的發掘」《文物》一九七六年第一期。

図3・5・7~10と同じ。ただし、罍B型2類Ⅱ式新は、《河南(1)》116。

難波作図。ただし、足鑄型断面模式図は、第一章注⑭前掲文献 Fig. 69 より抜粋・加筆した。

表1 (1) 中国科学院考古研究所二里頭工作队「河南偃師二里頭遗址三・八区発掘簡報」《考古》一九七五年第五期。

(2) 中国科学院考古研究所二里頭工作队「偃師二里頭遗址新發現的銅器和玉器」《考古》一九七六年第四期。

(3) 中国社会科学院考古研究所二里頭工作队「一九八四年秋河南偃師二里頭遗址發現的幾座墓葬」《考古》一九八六年第四期。

(4) 中国社会科学院考古研究所二里頭隊「一九八〇年秋

河南偃師二里頭遺址發掘簡報」〔考古〕一九八三年第

三期。

(4) 第五章注⑦前掲文獻。

(5) 河南省文物研究所「鄭州北二七路新發現三座商墓」

〔文物〕一九八三年第三期。

表2 (1) 楊育彬・趙靈芝・孫建國・郭培育「近幾年來在鄭州

新發現的商代青銅器」〔中原文物〕一九八一年第二

期。

(6) 河南省文物工作隊第一隊「鄭州市白家庄商代墓葬發

(2) 鄭州市博物館「鄭州市銘功路西側的兩座商代墓」

〔考古〕一九六五年第十期。

ただし、《河南(1)》は、《河南出土商周青銅器》編輯組

(3) 河南省博物館「鄭州新出土的商代前期大銅鼎」〔文

物〕一九七五年第六期。

九八一年。

謝辭

本稿は、昭和六三年一月に京都大学文学部に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。また、この概要は、昭和六

三年九月四日に京都で行われた中国考古学研究会大会で発表し、席上、林巳奈夫氏・飯島武次氏らの御教示をうけた。資料収集にあ

たっては、樋口隆康・林巳奈夫・上野佳也・弓場紀知・高浜秀・西村俊範・田辺美恵・河野圭子の各氏に、たいへんお世話になった。

本稿の作成にあたっては、小野山節先生に御指導をいただいた。また、岡村秀典氏を始めとする京都大学文学部考古学研究室の諸兄

姉・難波洋三氏には、常々、御教示・御批判を仰いでいる。紙面を拝借して、心より御礼申し上げます。

(京都大学大学院生)

bestehende Mentalité. Sie hielten ihre Verfassung für die politisch unvermeidlich Gegebenheit, um die städtische Autonomie im Reich zu bewahren. 2) Kürzlich gibt H. Schilling zur deutschen Geschichte von der Mitte des 16. bis zum Ende des 17. Jahrhunderts, die man bisher geschichtswissenschaftlich als "eine fade Periode" vernachlässigt hat, eine bemerkenswerte Perspektive mit dem Begriff der "Konfessionalisierung" oder der "zweiten Reformation". Die konfessionellen Verhältnisse dieses Zeitalters in Augsburg stehen trotz ihrer eigenartigen Entwicklung auch mit seiner Auffassung nicht in Widerspruch.

## RITUAL BRONZES OF THE EARLY STAGE

NAMBA Junko

The purpose of this study is to examine the development of Chinese ritual bronzes of the early stage by considering the chronology of bronzes from the Er-li-tou (二里頭) and the Er-li-kang (二里崗) periods. Before formulating a chronology based on changes in vessel form and decorative style, varieties of shape and the combination of friezes within one vessel type, which was produced through the early periods, were carefully divided. Examination of contemporary examples of each type resulted in dividing the Er-li-tou period into two sub-periods and the Er-li-kang period into four sub-periods. These sub-periods coincide with the chronological division of pottery from the Er-li-tou III period to the later stage of the upper Er-li-kang.

The development of the structure of casting molds is also considered. It can be pointed out that several types of bronzes, which served as ritual cooking vessels, began to be used rather than pottery. However, as casting techniques developed and decorations like the Tao-tie (饕餮) design became more and more exaggerated, the original function of the bronze vessels was forgotten, and new types came to be cast with many variations arising in each.